

『源氏一部之簡要』所収の「源氏物語」卷名和歌について

吉岡 貴子

はじめに

立命館大学附属図書館西園寺文庫には、表紙に「連歌賦物篇源氏物語一部簡要」と墨書された写本一冊が蔵されている（請求記号・九一一・二〇〇/R二七 資料番号・〇九八一〇〇三七四〇五）。その中には、表紙にあつたように、一条兼良が古来伝承の連歌における賦物を整理した「賦物篇」と、外題の「源氏物語一部簡要」に相当する「源氏一部之簡要」と題された作品とが、一冊に合綴されている。本稿ではこのうち、内題を「源氏一部之簡要」とする一書を取り上げ、考察する。

以前、この『源氏一部之簡要』について、収録されている『源氏物語』本文から抜き出された連歌寄合語を対象に検討を加えたことがある。その結果、『源氏一部之簡要』の収める全ての寄合語は、『光源氏一部連歌寄合』から抄出されたものであることを確認した。それに加え、『源氏一部之簡要』がその抄出作業を進

めるにあたって、『光源氏一部連歌寄合』以外の「源氏物語」寄合収録書（『源氏小鏡』『連珠合璧集』『源氏一部抜書』『源氏綱目』等）を参照していないであろうことや、『源氏一部之簡要』が寄合語と共に各巻の冒頭に掲載する「源氏物語」卷名和歌を重要視して、『光源氏一部連歌寄合』から寄合語の抄出を行ったであろうことを確認し得た。本稿では、『源氏一部之簡要』が収録する「源氏物語」卷名和歌を取り上げ、確認することが出来た幾つかの事項について報告したい。

一

『源氏一部之簡要』は、その記述から考えてみるに、『源氏物語』五十四帖に、雲隠巻の歌一首を加え、計五十五首の「源氏物語」卷名和歌を収録しているはずである。しかし、絵合・松風・薄雲・篝火・御幸・若菜下・鈴虫・紅梅・竹河の九つの巻において卷名和歌が記載されておらず、収録する「源氏物語」卷名和歌の

『源氏一部之簡要』所収の「源氏物語」卷名和歌について

数は、全部で四十六首となっている。

『源氏一部之簡要』が収録するこれら巻名和歌と同一の歌は、肥前島原松平文庫蔵、外題に「豎横和歌」とある写本一冊の中に収められている。『源氏六十三首之哥』にも確認することが出来る。この『源氏六十三首之哥』は、早く今井源衛氏によって翻刻・紹介された。「源氏物語」巻名和歌のみで構成される一書である。そこに収録されている「源氏物語」巻名和歌の総数は六十二首で、「源氏一部之簡要」より十六首も多くの歌を収録している。それは、先に『源氏一部之簡要』が載せていないと指摘した九巻の巻名和歌を収録していることに加え、夢の浮橋巻以降に、「源氏物語」の異伝の巻々である「すもり」「さむしろ」といった巻名を詠み込んだ巻名和歌七首を併載していることに因る。また、それぞれの歌の第一音目を繋いでみると、「なむあみたふつあみたふつあみたふつ……（「あみたふつ」を数度繰り返す）……あみたおとけ」となり、文字鎖の性質を持つ歌群であることが確認される。

こうした特徴を持つ歌群と同一の歌を『源氏一部之簡要』が収めているということは、『源氏六十三首之哥』のように、元來、この巻名和歌群はそれらのみで独立して存在していたのである。そしてその後、『光源氏一部連歌寄合』が収録する寄合語とともに再編され、『源氏一部之簡要』になったと考えられるのである。

二

ところで、『源氏一部之簡要』も『源氏六十三首之哥』も、巻名和歌の本文状態については、どちらかが一方的に良好であるとは言いがたい。例えば冒頭の桐壺巻の巻名和歌を確認してみると、『源氏一部之簡要』には、

なれぬれは君にちきりつ程をへて露のかことをこの葉に置とあつて、傍線を付した部分「ちきりつほ」と、巻名「桐壺」が詠み込まれていることが分かる。ところが一方の『源氏六十三首之哥』桐壺巻の巻名和歌を見ると、

なれぬれはたつに契つ聲をつて露のかことを言の葉にをくとあり、『源氏一部之簡要』において巻名が詠み込まれていた箇所が、「ちきりつこえ」となってしまうのである。つまり、『源氏物語』巻名和歌として最も重要である巻名を詠み込む部分に、誤写によるものであるか、本文異同が生じてしまっているのか。今例示した桐壺巻巻名和歌に関しては、『源氏一部之簡要』の方が本文の状態は良好であると言えそうであるが、反対に『源氏一部之簡要』の本文に異同が見える場合も存在する。一例として、『源氏一部之簡要』玉鬘巻巻名和歌を見てみると、

露はまたかつらき山にみたれけり正木色付嵐ふきつ、とあつて、傍線部「またかつら」とあるのが、本来「たまかつら」とあるべき本文箇所であろうことは想像出来るが、そうはなっていないことが分かる。そこで『源氏六十三首之哥』の玉鬘巻巻名

和歌を確認してみると、

つゆは玉かつらき山にみたれけりまた色付風吹つ、

とあって、先に巻名が詠み込まれていてと想定した箇所が、「玉かつら」となっていることを確認することが出来るのである。こうした巻名部分の混乱は、『源氏一部之簡要』では玉鬘・御法巻の巻名和歌に、『源氏六十三首之哥』では桐壺・関屋・梅枝・橘姫（別名である憂婆塞を詠み込んでいる）巻の巻名和歌にそれぞれ認められる。但しこうした巻名和歌本文の問題は、二書の記述を見合わせることで是正することが可能である。

巻名部分のみならず、『源氏一部之簡要』と『源氏六十三首之哥』の間には本文の異同が大変多く存在している。その一例として夕霧巻巻名和歌を見てみると、

・『源氏一部之簡要』夕霧巻巻名和歌

道もみえすすゑもはるか夕霧に分まよひぬる秋の山人

・『源氏六十三首之哥』夕霧巻巻名和歌

道もみえすすゑもはるか夕霧に分まよひぬる秋の山野へ

とあって、この二首は同じ夕霧巻の巻名和歌であるにも関わらず、歌の冒頭部分において、「道もみえ」（源氏一部之簡要）・「道もみえす」（源氏六十三首之哥）といった異同が存在し、歌の最後の部分にも「秋の山人」（源氏一部之簡要）・「秋の山野へ」（源氏六十三首之哥）という異同が存在している。こうした本文異同が認められる箇所に関して、どちらの本文が「源氏物語」巻名和歌として相応しいものであるのかを判断する際に、一

つの大きな指標となるのが「源氏物語」本文中に見える文言である。まず、異同も含む夕霧巻巻名和歌の前半部分「道もみえ（みえす）すゑもはるか夕霧に」に使用されており、巻名でもある「夕霧」という語句について見ていく。この「夕霧」という語句は、『源氏物語』夕霧巻の物語本文、

いとくるしげにし給なりとて人々もそなたにつとひておほかたもかゝるたひ所にあまたまいらさりけるにいと、人すくなにて宮はななめ給へりしめやかにておもふこともうち出つへきおりかなとおもひる給へるにきりのた、このきのもとまたてたちわたればまかてんかたもみえすなり行はいか、すへきとて

山さとのあはれをそふるゆふきりにたちいてん空もなき心ちしてときこえ給へは

やまかつのまかきをこめてたつきりも心そらなる人とはと、めすほのかにきこゆる御けはひになくさめつ、まことにかへるさわすればはてぬ中空なるわさかないへちはみえすきりのまかきはたちとまるへうもあらずやはせ給・・・（中略）・・・さてみちいとたゞしければこのわたりにやとかり待るおなしうはこのみすのもとにゆるされあらなむあざりのおる、ほとまでなとつれなくの給

の中に、唯一の用例が認められる。ここで展開されている物語場面は、夕霧が、彼の想い人である落葉の宮の側近く一夜を過ごせ

るよう、立ち込めた霧を口実に事を進めていく場面である。この物語本文中に「夕霧」を詠み込んだ夕霧詠歌が存在し、その「夕霧」歌周辺に、巻名和歌中の「道」「みえす」という言葉も併せて確認することが出来るのである。このように巻名和歌中で使用される語句の用例が集中して認められることから、『源氏一部之簡要』【源氏六十三首之哥】に収録される夕霧巻巻名和歌「道もみえ（みえす）すゑもはるか夕霧に」部分の下敷きとして、この物語本文箇所（場面）を想定することが出来るのである。そしてそのように考えるならば、巻名和歌冒頭に認められた異同に關しては、『源氏六十三首之哥』にあるように「道もみえす」とするのが妥当と考えられるのである。

一方、歌の最後を「秋の山人」（源氏一部之簡要）・「秋の山野へ」（源氏六十三首之哥）のどちらとするのかについてであるが、先と同様に『源氏物語』に見える文言を重要視するならば、『源氏物語』夕霧巻物語本文、

しかのいといたくなをわれをとらめやとて

里とをみをの、しのはらわけてきてわれもしかこそこ
 ゑもおしまねとの給へは

ふちころも露けき秋の山ひと
 そそへつるよからねとおりからにしのひやかなるこわつか
 ひなとよろしうき、なし給へり

の中にある、落葉の宮に仕える少少将という女房の詠んだ、「ふちころも露けき秋の山ひととはしかのなくねにねをそそへつる」と

いう歌に注目すべきであろう。なぜならこの歌の中には、「秋の山ひと」という、『源氏一部之簡要』掲載の巻名和歌本文と同一語句の使用を確認することができるのである。この物語記述に従うならば、夕霧巻巻名和歌の最後の部分に關しては、『源氏一部之簡要』が掲載する「秋の山人」という本文を採択すべきなのである。以上の考察によつて、夕霧巻巻名和歌本文を「道もみえすすゑもはるか夕霧に分まよひぬる秋の山人」と確定することが出来るのである。

桐壺・玉鬘・夕霧巻の巻名和歌を通じて確認できたように、『源氏一部之簡要』と『源氏六十三首之哥』が持つ本文は、双方補い合うところが存在している。また、巻名部分以外の箇所でも、二書の間で異同が存在する場合、『源氏物語』本文を参考にしつつ和歌本文を確定していくことが、ある程度可能であることが分かってきた。

『源氏六十三首之哥』を翻刻・紹介された今井氏が、その本文状態を、「かなり多くの誤脱が認められる」と評されたことを思い起こしてみると、『源氏一部之簡要』の収録する巻名和歌は数こそ全四十六首と少ないものの、この巻名和歌群の本文が抱える問題を考えていく上で有効に作用するのである。更には、これら二書に取められている歌群が、いかに『源氏物語』本文を踏まえているのか。つまり、『源氏物語』巻名和歌として、いかに評価することが出来るのかという考察を可能なものとしてしているのである。

先の夕霧巻巻名和歌における考察でも少し触れたが、『源氏一部之簡要』所収の巻名和歌と『源氏物語』本文を見合わせていく作業は、これら巻名和歌を詠んだ人物が、『源氏物語』各巻のどういった記述・場面に注目し、巻名和歌に詠み込んだのか。また、これら巻名和歌を詠んだ人物が、『源氏物語』本文をどういった位相で享受していたのかを量る上でも重要となってくるであろう。そこで続いては、『源氏一部之簡要』所収の巻名和歌数首を通じて、これら巻名和歌が『源氏物語』本文の表現をいかに利用しているのか。即ち、『源氏物語』本文の内容をいかに撰取し、和歌に投影しているのかを考えてみる。

まず『源氏一部之簡要』収録の巻名和歌の持つ一つの傾向として、『源氏物語』各巻本文中にすでにその巻名を詠み込んだ和歌が存在している場合、その歌を中心とする物語本文から語句を選び、巻名和歌を詠んでくることが挙げられる。

そうした傾向が顕著に顕われているであろう、

・『源氏一部之簡要』葵巻巻名和歌

みしめ縄かけてそいのるあふひ草神の恵をたのひ我恋

を一例として、巻名和歌に認められる『源氏物語』撰取について考えてみる。『源氏物語』葵巻本文中には巻名である「あふひ」を詠み込んだ光君と源の内侍の贈答歌がある。その歌を中心に前

後の『源氏物語』本文を次に抜き出す。

けふも所もなくたちにはけりむまはのおと、のほとにたてわつらひてかむたちめの車ともおほくてものさはかしけなるわたりかなとやすらひ給によろしき女車のいたうのりこほれたるよりあふきをさしいて、人をまねきよせてこ、にやはた、せ給はぬ所さりきこえむときこえたりいかなるすき物ならむとおほされて所もけによきわたりなればひきよせさせ給ていかてえ給へる所そとねたさになんとのたまへはよしあるあふきのつまをおりて

はかなしや人のかさせるあふひゆへ神のゆるしのけふをまちけるしめのうちにはとあるてをおほしいつればかの内侍のすけなりけりあさましようふりかたくもいまめくかなとにくさにはしたなう

かさしけるこ、ろそあたにおもほゆるやそうち人になへてあふひを女はつらしと思きこえけり

くやくしくもかさしけるかななのみして人たのめなる草葉はかりをとときこゆ

この物語場面は、光君が紫の上を伴なって賀茂の葵祭の見物に訪れた際に、老齢でありながら好色の止まない源内侍と歌を応酬する場面である。その中で、まず源内侍が光君に詠みかけた「はかなしや人のかさせるあふひゆへ神のゆるしのけふをまちける」という歌の中には、巻名である「あふひ」をはじめ、巻名和歌で使用されている「神」という語句が認められる。更にこの歌に源内

侍が継いだ「しめのうちには」という言葉についても、巻名和歌中の「みしめ繩」と連関する語句であることが確認される。これを受けての光君からの返歌「かさしけるこゝろそあたにおもほゆるやそうち人になへてあふひを」の中に、再度「あふひ」という語が詠み込まれている。しかしながら、それよりも注目すべきは、この光君歌に源内侍が返した「くやくしくもかさしけるかななのみして人たのめなる草葉はかりを」歌の中に、巻名和歌中の「たのび」と「草」という語句が認められることである。このように『源氏一部之簡要』所収の葵巻巻名和歌「みしめ繩かけてそのるあふひ草神の恵をたのび我恋」の中に使用されている語句の多くを、引用した『源氏物語』葵巻本文中、特に源内侍が詠んだ歌の中に集中して確認することが出来るのである。また、巻名和歌そのものが意図するところを考えてみても、源内侍という存在を中心に、彼女の光君への叶わぬ恋情が詠まれていると考えられるのである。

葵巻巻名和歌を一例として、『源氏一部之簡要』所収の巻名和歌に認められる『源氏物語』本文撰取について考えてきたわけであるが、『源氏物語』中に、既にその巻の名前を詠み込んだ歌が存在する場合、その物語歌を中心に語句を選定し、巻名和歌を詠んでくる傾向にあるのである。

しかし、『源氏物語』全巻に巻名を詠み込んだ和歌が存在するわけではない。そうした巻の場合、その巻中のどういった物語本文を利用して、巻名和歌は詠まれているのであろうか。

そこで、巻名を詠み込んだ歌が、物語本文中に存在しない桐壺巻に注目して、『源氏物語』本文撰取の様相を確認しておきたい。
・『源氏一部之簡要』桐壺巻巻名和歌

なれぬれは君にちきりつ程をへて露のかことをことの葉に置この巻名和歌が、桐壺巻のどの物語本文に注目しているのかを考える上で、巻名和歌に使用されている「かごと」という語に注目したい。この「かごと」は、桐壺巻中に用例を一例しか確認することが出来ない語句である。左にその使用が認められる『源氏物語』桐壺巻の本文箇所を示す。

月はいりかたのそらきようすみわたれるに風いとす、しくなりてくさむらのむしのこゑくもよほしかほなるもいとたち
はなれにくき草のもと也

す、むしのこゑのかきりをつくしてもななき夜あかすふるなみた哉えものりやらす

いと、しく虫のねしけきあさちふに露をきそふる雲のう
いと、かごともきこえつへくなんといはせ給ふ

この本文は、桐壺更衣亡き後、更衣の里宅で、祖母である母君と共に喪に服す光君のもとに、帝の勅使靱負命婦が弔問に訪れる場面の一部である。この場面の最後に、母君と靱負命婦が歌を交わすのであるが、その贈答歌を中心とする記述が右の本文箇所である。その内容とは、秋の風情と共に物悲しさの募る母君のもとから、なかなか辞去することが出来ずにいる靱負命婦が、その想いを託して、「す、むしのこゑのかきりをつくしてもななき夜あか

すふるなみた哉」と詠んだのに対し、母君が「いと、しく虫のねしけきあさちふに露をきそふる雲のうへ人」と返歌し、続けて「かこともきこへつへくなん」と言葉を継いで、邸宅を後にすることを躊躇う靱負命婦に、「これ以上私を悲しませてくれるな」と申し伝えるというものである。このうち、母君の「かこともきこへつへくなん」という言葉に、桐壺巻中、一例しか用例が存在しない「かごと」という語句を確認することが出来るのである。また、その直前の母君詠歌「いと、しく虫のねしけきあさちふに露をきそふる雲のうへ人」の中には、巻名和歌に使用されている「露」「置」といった語句も確認することが出来るのである。以上ことから、桐壺巻巻名和歌の後半部分「露のかごとをことの葉に置」の下敷きとして、この母君詠歌、及びその周辺にある記述が存在していると考えられるのである。このように、『源氏一部之簡要』所収の巻名和歌は、『源氏物語』本文中に巻名を詠み込んだ和歌が存在しない巻においても、物語本文中の歌に留意し、巻名和歌を詠んでいるのである。

ここで更に、「かごと」「露」「置」以外の巻名和歌使用語句が、『源氏物語』桐壺巻本文の中でどのように使用されているのかについて確認しておきたい。まずは巻名和歌中の「ちぎり」という語句について、『源氏物語』桐壺巻中の用例を見ておく。この語句は桐壺巻中、七例の用例を確認することが出来るもので、全ての用例を左に明示する。

「ちぎり」一用例(1)

『源氏一部之簡要』所収の「源氏物語」巻名和歌について

さきの世にも御ちぎりやふかかりけむ世になくきよらなるたまのをのこみこさへうまれ給ひぬ

「ちぎり」一用例(2)

きし方ゆくすゑおほしめされすよろつのことをなくくちぎりのたまはすれと御いらへもえきこえ給はす

「ちぎり」一用例(3)

かきりあらむみちにもをくれさきた、しとちぎりせ給けるをさりともうちすて、はえゆきあらしとのたまはするを

「ちぎり」一用例(4)

わか御心ながらあなかちに人めおとろく許おほされしもなか、るましきなりけりと今はつらかりける人のちぎりになむ

「ちぎり」一用例(5)

あさゆふのことくさにはねをならへ枝をかかさむとちぎりせ給しにかなはさりけるいのちの程つきせすうらめしき

「ちぎり」一用例(6)

さるへきちぎりこそおはしましけめそこのらの人のそしりうらみをもは、からせ給はす

「ちぎり」一用例(7)

いときなきはつもとゆひになかき世をちぎり心はむすひこめつや

桐壺巻中には、以上七例の「ちぎり」用例を見出すことが出来るわけであるが、(1)～(6)の「ちぎり」用例は、桐壺帝と桐壺更衣の

間で使用されており、二人の親密な関係を示す語句として使用されていることが判る。つまり、(1)～(6)の「ちぎり」は桐壺巻の物語の中で、ほぼ同じ意味合い、桐壺帝と桐壺更衣との関係性を象徴する語として使われているのである。ちなみに(7)として挙げた光君元服の場面における桐壺帝詠歌「いとときなき・・」における「ちぎり」用例は、光君とその後見人となった左大臣家との縁故を意味するものである。続いて、巻名和歌中の「ことの葉」という語句について、『源氏物語』桐壺巻における用例から、いかなる場面で使用されている語句であるのかを確認しておく。『源氏物語』桐壺巻に認められる「ことの葉」の用例は、左の二例である。

「ことの葉」用例(1)

心ことなる物のねをかきならしはかなくきこえいつる
 事の葉も人よりはことなりしけはひかたちのおもかけに
 つとそひておほさるゝにも

「ことの葉」用例(2)

このころあけくれ御覽する長恨哥の御系亭子院のか、せ給
 て伊勢つらゆきによませ給へるやまとことの葉をももろ
 こしのうたをもた、そのすちをそまくらことにせさせ給

この二例の用例が認められた物語本文箇所は、ともに桐壺の更衣の死後、桐壺帝が更衣を思い起こし、その死を嘆く様子を描いた箇所である。これにより、「ことの葉」という言葉が、『源氏物語』桐壺巻の中でも、桐壺帝の亡き更衣への強い愛執の念を描く物語

場面に使用されていることが確認されるのである。

以上、『源氏一部之簡要』桐壺巻巻名和歌「なれぬれは君にちぎりつ程をへて露のかことをことの葉に置」に使用されているいくつかの語句を取り上げ、それらが『源氏物語』桐壺巻においてどのように使われている語句であるのか確認を進めてきた。その結果、桐壺巻の前半に綴られる桐壺更衣の死去と、その死を受けて嘆き悲しむ人々（具体的には桐壺帝と更衣の母君）の様子を描写した物語本文から、言葉が選び抜かれ、巻名和歌「なれぬれは君に・・」が詠まれている可能性が非常に高いことが明らかとなったのである。

このように、『源氏一部之簡要』が収録する巻名和歌は、第一に『源氏物語』本文中の和歌を中心に、そこで使われている言葉を使用して巻名和歌を詠んでいる。また同時に、言葉の採られた物語歌周辺に見える語句（例えば葵巻「みしめ縄」や桐壺巻「かごと」等）も、積極的に巻名和歌中に採り込んでくる傾向にあると考えられる。すると、これら巻名和歌を詠んだ人物とは、『源氏物語』中歌は勿論のこと、それ以外の物語本文についても、かなりしつかりとした知識を持った人物であったと考えられるのである。

ここまでの考察を踏まえ、『源氏一部之簡要』所収の巻名和歌が、『源氏物語』のどういった物語場面に注目してくるのかについて言及しておく。これまでに取り上げた『源氏物語』本文及び場面を概観してみると、物語の場面設定として、複数の人間が一

つの場合に顔を合わせ、その周辺の自然の景物等に誘い出されるように歌を交わしている場面が多く見られたことが指摘できるであろう。そしてそれらの場面には、物語の中心人物が余り登場せず、桐壺更衣の母君や源内侍など、物語の中では端役とも言える人物たちが登場してきているのである。延いては卷名和歌が詠じる内容に関しても、そういった人々の登場する個々の場面に拘つたものであると言え、各巻に描かれている物語の内容、全体を踏まえて卷名和歌を詠んでくることがないのである。

四

こうした『源氏物語』本文の積極的な利用が認められる一方で、『源氏一部之簡要』が収録する「源氏物語」卷名和歌の中には、『源氏物語』本文の利用において、これまでに確認してきたものとは全く異なる傾向を示すものも含まれている。つまり、『源氏物語』本文中に見えない語句を用いて卷名和歌を詠み、その内容も物語世界を反映していないと見える歌が、この卷名和歌群には含まれているということである。

そうした傾向を顕著に示す一例として、

・『源氏一部之簡要』野分卷卷名和歌

あさき瀬の流のわきてさひしきは氷のむすふ冬の山川

が挙げられる。この卷名和歌中に使用されている全ての語句に關して、その用例を『源氏物語』野分卷本文中に一切認めることが

できない。加えて野分卷に描かれている物語とは、中秋の六条院に例年になく強い野分が訪れ、夕霧と光君が方々に住まう女君達を見舞う情景を中心に進行する内容である。このことを考え合わせてみると、特に卷名和歌の後半部「氷のむすふ冬の山川」といった記述には、野分卷に描かれている物語世界が、何ら投影されていないと判断せざるを得ないのである。

こういった卷名和歌を確認するに至り、『源氏一部之簡要』が収録する卷名和歌群の『源氏物語』本文撰取の態度とは、相反する二つの方向性が存在しているかに見える。即ち、いくつかの巻においては丁寧¹⁵にその巻の中に認められる語句を拾い、更に、それらの語句が使用されている『源氏物語』場面をも意識して卷名和歌を詠む。他方、『源氏物語』内の語句を全く採らず、その巻に描かれている物語内容から考えても相応しくない卷名和歌を詠むといった、大きく二つのパターンに分けることが出来ると考えられるのである。

しかしながら、考察を進めていく中で、こういった『源氏物語』からの逸脱を示す卷名和歌を、「源氏物語」卷名和歌として理解することが可能であることが分かってきた。これらの卷名和歌を理解する際に、連歌における詠歌意識や連歌の寄合を念頭に置くことにより、それが可能となるのである。そのように考えられる具体例として、

・『源氏一部之簡要』所収初音卷卷名和歌

あかすた、五月そなけや時鳥心つくしにまちし初ねを

について見ていく。『源氏物語』初音巻には、

きたのおと、よりわざとかましくしあつめたるひけこもわり
 こなたたてまつれ給へりえならぬ五えうのえたにうつるうく
 ひすもおもふ心あらんかし

とし月をまつにひかれてふる人にけふうくひす
 のはつねきかせよをとせぬさとのときこへたまへるをけに
 あはれとおほし、ることいみもえし給はぬけしきなりこの御
 かへりはみつからきこえたまへはつねをしみ給へきかたにも
 あらすかして御す、りとりまかなひか、せたてまつらせた
 まふ

とあるように、物語本文中に、巻名である「初音」を詠み込んだ
 「とし月をまつにひかれてふる人にけふうくひすのはつねきかせ
 よ」歌を確認することができる。この物語歌と巻名和歌は、「初
 ね」は勿論のこと、「まつ」という言葉を使用している点におい
 て一致が認められる。しかし、物語歌には「うぐひす」とあるに
 も関わらず、巻名和歌には「時鳥」とあることや、『源氏物語』
 初音巻が、光君の栄華の象徴である六条院にはじめての正月がき
 た情景を描くものであるにも関わらず、巻名和歌は「五月」とい
 う時期を限定してしまう言葉を使用して歌を詠んでいるのであ
 る。以上のことを勘案すると、この初音巻巻名和歌は、『源氏物
 語』本文（特に内容）から大きく逸脱していると判断せざるを得
 ないのである。

こうした『源氏物語』本文からの逸脱を考えていく上で、一つ

の参考となるのが、連歌の寄合を集成した『連珠合璧集』¹³に見え
 る次のような記述である。

・『連珠合璧集』十六、「鳥類」

郭公トアラバ、初郭公 山郭公

鶯かいこの中にあり 卯花 花橘 山 村雨 月 雲間
 一こゑ 鳴ふるす 五月 忍ね ね覚 社のしづく

涙なそへそ

今朝きなきいまだ旅なる郭公花橘にやどはからなん

きかずともこ、をせにせん郭公山田の原の杉の村立 西行

・『連珠合璧集』四十二、「引合」

夏の始の心ナラバ、

夏のきて 卯月 衣がへ 卯はな 夏木立青木立

しげる木 時鳥を待^{初音} あふひ 神まつる ひとへの袖

残桜 青梅

まず、『連珠合璧集』十六、「鳥類」には「郭公トアラバ」として
 「鶯」を寄合語として挙げてきており、先ほど『源氏物語』本文
 からの逸脱とした「うぐひす」から「時鳥」への変換が、こうい
 った連歌の寄合を基にした見識から発生していると思われることが可
 能となってくる。同時にこの「郭公トアラバ」の記事の中には
 「五月」という言葉が確認され、「うぐひす」と入れ替わる形で詠
 み込まれた「時鳥」に誘引されて、「五月」という語句が巻名和
 歌に入り込んだと見ることができよう。更に、『連珠合璧集』四
 十二、「引合」、「夏の始の心ナラバ」の記事には、「時鳥を待^{初音}

という記事が確認され、卷名和歌の中で、『源氏物語』初音巻

おわりに

「としつきを・・・」歌と一致する文言とした「はつ音」「まつ」という語句が、「時鳥」にまつわる寄合であることを確認することが出来るのである。このように「連珠合璧集」の記事を基に考えてみれば、問題の初音巻卷名和歌とは、正月に鶯の初音を待つもの（明石の上が紫の上のもとで養育される実娘、明石の姫君に正月の挨拶を求めた歌）であった『源氏物語』初音巻の卷名歌を、連歌の寄合の意識に則って、夏五月に時鳥の初音を待つ歌に仕立て直した歌であると考えられるのである。このように連歌における寄合の意識を念頭に置けば、初音巻卷名和歌に確認された『源氏物語』世界からの逸脱の原理を理解することが出来るのである。それと同時に、この卷名和歌に見えた物語本文からの逸脱が、『源氏物語』本文を全く無視した形で行われたものではなく、むしろ『源氏物語』本文に見える表現を踏まえ、そこを出発点とする逸脱であったと見る事が可能となってくるのである。

一見したところ『源氏物語』撰取の態度に於いて方向性を異にする歌が混在するかに見えた『源氏一部之簡要』所収の「源氏物語」巻名和歌群であったが、各歌を理解する際に「源氏物語」のみではなく、「連歌」における詠歌意識を持ち込むことで、歌群としての統一性を保有する（我々がそれを理解することが出来る）可能性が高いのである。

『源氏一部之簡要』所収の「源氏物語」巻名和歌について、歌本文の問題や、『源氏物語』本文撰取の様相といった観点から、様々論じてきた。この中でも取分け、巻名和歌の中に連歌の要素が認められたことは大きな意義があるであろう。これら巻名和歌群の中には、今回の考察の中では指摘するに及ばなかった連歌的側面がまだまだ内在していると考えられる。そうした点について今後更に考察を加えていきたいが、そのことと合わせて、これらの和歌が詠まれた背景を考えてみると、果たして独吟によるものであったのかどうか疑問として残った。複数の人間により、巻名和歌中に認められる歌を詠む上での制約や、『源氏物語』世界からの逸脱をも楽しむ形で詠まれたものであった可能性も捨て切れないのである。つまり、和歌を理解する際にだけではなく、これらの巻名和歌が詠まれた場についても、連歌的な場を想定し得るのではないかということである。今後、巻名和歌一首一首への理解を深化させていく中で、この問題については考えていきたい。

また、連歌的側面が明らかとなったことにより、これら巻名和歌群が『光源氏一部連歌寄合』に収録されている寄合語と合わさって『源氏一部之簡要』となったことは、決して偶然ではなかったと考えられるのである。『光源氏一部連歌寄合』は、これまでに伝本が二本しか確認されていない。その理由として、『源氏一

部之簡要』や『和歌集心鉢抄抽肝要』、『光源氏一部連歌寄合之事』といった書物に確認されるように、その成立後、他の連歌関連書と共に再編される活動が盛んであったことと無関係ではあるまい。特に今挙げた書物の中でも、『和歌集心鉢抄抽肝要』に関しては『源氏一部之簡要』と寄合語の表記の上で一致を見せてきており、『源氏一部之簡要』の成立を考えていく際に、その関連性を看過することは出来ない。

以上の点から、立命館大学附属図書館西園寺文庫が蔵する、外題を『連歌賦物篇 源氏物語一部簡要』とする一書は、今回取り上げた『源氏物語』巻名和歌が詠まれた背景や、伝来してきた背景を考えていく上で、非常に示唆的であると言えるのである。

【注】

- (1) 拙稿『源氏一部之簡要』解題―主に収録される寄合語について―(『立命館文学』第五八三号、二〇〇四年二月)
- (2) 貞治四(一二三六五)年に二条良基とその周辺の人々によって編纂された『源氏物語』寄合語を集めた書物。加藤洋介氏「二条良基周辺の源氏学―国文学研究資料館蔵『光源氏一部連歌寄合』の翻刻と紹介―」(『国文学研究資料館紀要』第十八号、一九九三年二月)に詳しい。
- (3) 『源氏一部之簡要』が収録する、『源氏物語』の巻名を詠み込んだ和歌を、本稿の中では便宜上『巻名和歌』と

呼ぶ。

(4) このことは、注(2)加藤氏論文において既に指摘されている。

(5) 今井源衛氏「新資料紹介『源氏ゆふだすき』と『源氏六十三首之哥』」(『語文研究』第二十五号、一九六八年三月)。後に『王朝文学の研究』(角川書店、一九七〇年一月)に収録。

(6) 『源氏六十三首之哥』については、宮川葉子氏「『源氏物語』巻名歌―柳沢吉里「詠源氏卷々倭歌」を中心に」(『青山語文』第十八号、一九八八年三月)及び、同氏「詠源氏物語卷々和歌の系譜―源氏供養の伝流を軸として」(『和歌文学研究』第六十二号、一九九一年四月)。その後、『三条西実隆と古典学』(風間書房、一九九五年一月)に収録)の中において取り上げられ、言及されている。

(7) 『源氏六十三首之哥』本文については、国文学研究資料館蔵マイクロフィルム複写を使用し、肥前島原松平文庫蔵の原本閲覧の機会を得て、私に翻刻を行ったものである。注(5)今井氏の翻刻本文と異なる部分は私意による。

(8) 『源氏一部之簡要』と『源氏六十三首之哥』が収める全ての巻名和歌を対象に行った本文対校を、『資料』として本稿最後に掲載する。

(9) 『源氏物語』 引用本文については、池田亀鑑氏『源氏物語大成』一、六（普及版、中央公論社、一九八四年一月）を使用する。

(10) 今井源衛氏『王朝文学の研究』（角川書店、一九七〇年一〇月）三八五頁四行目。

(11) 以下に引用する巻名和歌本文については、基本的に『源氏一部之簡要』における本文を引用するが、必要と判断した箇所については、『源氏六十三首之哥』における表記を傍書する。

(12) 現在までの考察では、『源氏一部之簡要』収録の巻名和歌の『源氏物語』本文撰取は、中世期に成立し、広く流布した『源氏小鏡』『源氏大鏡』といった『源氏物語』梗概書によってカバーできる範囲を超えており、『源氏物語』本文そのものに精通した人物を詠者として想定すべきであらう。

(13) 野分巻巻名和歌に見える物語世界からの逸脱は、謡曲「玉鬘」のように、『源氏物語』の巻名を冠しながらその物語内容から逸脱していく世界と繋がるものかもしれない。

(14) 『連珠合璧集』引用本文については、『連歌論集（二）』（三弥井書店、一九七二年四月）所収の翻刻本文を使用する。

(15) 巻名和歌に見える『源氏物語』本文からの逸脱に関し

ては、連歌のみならず「源氏物語」古注釈の類は勿論のこと、『源氏物語』を本説とする謡曲の世界にまで視野に入れて考察を進めるべきと考えている。

(16) 京都大学国語国文学研究室所蔵。その内容については、堀部（鹿嶋）正二氏が本書に関する論考（解説）の中で「良基の言説を中心に何人か後人が編術したもの」と指摘しておられる（『和歌集心鉢抄肝要』大学堂書店、一九六九年六月）。この書の内、「源氏寄合」と立項されている部分と『光源氏一部連歌寄合』とが密接な関連性を有することが、寺本直彦氏『源氏物語受容史論考』（風間書房、一九七〇年五月）の中で確認されている。

(17) 古典文庫『良基連歌論集（三）』に翻刻収録。『源氏小鏡』と『光源氏一部連歌寄合』の寄合語、『山頂湖面抄』所収の「源氏物語」巻名和歌を一書にまとめた書である。解題において岡見正雄氏は「寓目した室町時代の一写本」を翻刻したとされているが、現在のところこの底本については所在不明。本書と同様の内容を持つ零本（藤裏葉）『夢浮橋巻のみ残』が国文学研究資料館に蔵されている。（18）注（一）拙稿中、『源氏一部之簡要』早蕨巻に掲載されている寄合語「古筆」に関する考察で、『和歌集心鉢抄肝要』所収、「源氏寄合」との関連を指摘したことによる。（19）注（16）引用論文において、堀部（鹿嶋）氏は、『和歌集心鉢抄肝要』の成立について「應永二十四年以降の

成立になる後人仮託の書と思われる」と論述しておられる。『源氏一部之簡要』成立を考える際にも参考とすべき所見であろう。

〔付記〕 本稿は、第五十一回立命館大学日本文学会大会における口頭発表をもとにしたものである。資料の閲覧、翻刻の許可を下さった肥前島原松平文庫・立命館大学附属図書館、並びに発表当日、ご教示下さいました諸先生方に、末筆ながら厚く御礼申し上げます。

(よしおか・たかこ 本学大学院博士後期課程)

〔資料〕「源氏一部之簡要」卷名和歌と「源氏六十三首之哥」異同一覧

立命館大学附属図書館西園寺文庫所蔵「源氏一部之簡要」収録の「源氏物語」卷名和歌と、肥前島原松平文庫所蔵「源氏六十三首之哥」収録の同歌との対校を全て掲載する。

桐壺卷

(簡) なれぬれは 君にちきりつ程をへて露のかことをこの葉に置
(六) なれぬれはたつに契つ聲をつて露のかことを言の葉にをく

帚木卷

(簡) 紅葉、は木、の梢に織はへて錦をあらふ秋の山かせ
(六) 無みちは、き、の梢におりかへて錦をあらふ秋の山かせ

空蟬卷

(簡) 秋 近き木の下露のみたる、は鳴うつせみの涙なりけり
(六) あきちかき木の下露の待る、は鳴 空蟬のなみたなりけり

夕顔卷

(簡) みても猶み まくほしきは 夕顔の花やか成 し人のふるまひ
(六) 弥てもなを見まくほしき ゆふかほの花になれにし人の 振舞

若紫卷

(簡) 尋 きてゆかりをとへは 武蔵の、若紫のつゆははかなし
(六) たつねきてゆかりをとへはむさし野、若紫の露ははかなし

末摘花卷

(簡) ふみ分る山路の露に匂ひきて末つむ花の色も久しき
(六) ふみわくる山路の露に、ほひきて末摘花の色もひさしく

紅葉賀卷

(簡) 月の夜は紅葉の風にたくひきて錦をしけるをの、山里
(六) つきの夜はもみちの風にたなひきて錦をしける小野の山里

花宴卷

(簡) あたに散花のえむをはむすは しを春の別はさても悲しも
(六) あたにちる花のえんをはむすはすしを春の別は扱もかなしき

葵卷

(簡) みしめ縄かけてそいのるあふひ草神の 恵をたのひ我恋
(六) みしめなわかけてそいのるあふひ草神のめくみを憑む

賢木卷

(簡) 瀧本の神の社のさか木はにゆふしてかけて御祓せんとや
(六) たきもとの神の社の 榊葉に白木綿かけてみそきせんとや

花散里卷

(簡) 吹をくる風のたよりをしるへにて花散里をたつねてそとふ
 (六) ふきをくる風をたよりのしるへにて花ちる里を尋てそとふ

須磨卷

(簡) 月に行すまのうら人別ぬるかいそへにちかくよる波の音
 (六) つきにねぬ須磨の浦人なれぬるか磯辺にたかく寄波の音

明石卷

(簡) 秋の夜の月影みえて明石かた真砂にしろく露そ置そふ
 (六) あきの夜の月影きえてあかしかに砂に白く露そ置そふ

澤標卷

(簡) みをかさき水ともいはし身をつくし霞てわたる浦の松かせ
 (六) みほさき道共いwashimiほつくし霞にて渡る浦の松かせ

蓬生卷

(簡) たれも又哀とやみし蓬生の露のをく野のへのやすらひ
 (六) たれも又あわれとや見し蓬生の露の置野ののへにやすらひ

関屋卷

(簡) ふしのねのすそ野ははれて清見かた関やに月の影はやとしつ
 (六) ふしのねのすそ野ははれて清見湯岩屋に月の影はやとしつ

絵合卷

(簡) ナシ
 (六) つれて行雲井の鶴の一つかひ聲あわせたる暮のさひしさ

松風卷

(簡) ナシ
 (六) あたる迄その香そしるき山里の松かせかよ宿のこふはい

薄雲卷

(簡) ナシ
 (六) 見たたせは花は尾上に顕てうす雲はる、をちの山里よ

朝顔卷

(簡) たえずまを哀とそみる種の日影をみちて露にしたかふ
 (六) たえするを哀とそ見る朝かほの日影を待て露にしたかふ

乙女卷

(簡) 更る夜の月に余波をとめぬるか真木の下戸もさ、ぬかりいほ
 (六) ふくる夜の月に余波の乙女子か真木の下戸もさ、ぬかり庵

玉鬘卷

(簡) 露はまたかつらき山にみたれけり正木色付嵐ふきつ、
 (六) つゆは玉かつらき山にみたれけりまたき色付嵐吹つ、

初音巻

- (簡) あかすた、五月そなげや時鳥心つくしにまちし初ねを
- (六) あかすた、五月そ鳴けや蜀魂心尽しに待し初音を

胡蝶巻

- (簡) 見えわかすこてふは世よにたくあつ、枕ちり敷庭のをちかた
- (六) 見えわかす小蝶は花にたくひつ、桜ちりしく庭の遠方

蛩巻

- (簡) 立わたり、蛩の影のうつろひて水の光のまさる草の井
- (六) たちわたるほたるのかげのうつろひて水に光のまさる玉の井

常夏巻

- (簡) ふしなれて床なつかしき移香をいつより妹か袖に匂ひし
- (六) ふしなれてとこなつかしき移香をいつ 迄いもか袖にほひし

篝火巻

- (簡) ナシ
- (六) 月見れはたまきの桜ちりか、り光やみかく風や川岸か

野分巻

- (簡) あさき瀬の流のわきてさひしきは水のむすふ冬の山川
- (六) あさきをのなかれのわきてひさしきは氷のむすふ冬の川

御幸巻

- (簡) ナシ
- (六) みかりはの狩場のみの、御幸に千代ふる里誰か行らん

藤袴巻

- (簡) 誰か又きてもたをらん藤はかまほころひにけり心やをかまし
- (六) たれか又来もたとらむ藤はかまほころひにける心 おかまし

巻柱巻

- (簡) ふちまきはしら波立て宇治川の河霧ふかくみえわたるをや
- (六) ふちまきは白波立て宇治川の河霧ふかく見渡すをや

梅枝巻

- (簡) 月影のかすめるやとの梅かえはおほろけならぬ人そきてとふ
- (六) 月影のかすめる宿の梅かははおほろけあらぬ人そきて問

藤裏葉巻

- (簡) あら磯のきしへの岩に咲藤のうら葉を波のあらふ川 哉
- (六) あら磯のきしへの岩に咲藤のうら葉を浪のあらふかわさぬ

若菜上巻

- (簡) みよしの、芳野、草もたえせねは老ぬる身ともわかな摘らん
- (六) みよしの、芳野の草もたえせねは老せぬ身にも若菜摘也

若菜下巻

(簡) ナシ

(一六) たちわたる霞はかなしはかなくも飛きて行雁のひとつら

柏木巻

(簡) 古郷に初雁かねのきなくかし萩の露ふく秋風そたつ

(一六) ふる里に初雁金のきてなかしはきは露吹秋かせそふく

横笛巻

(簡) つてにふくさ夜ふけかたの横ふえの音のみにしむ独ねの床

(一六) つてにふく少夜更方の横笛の音の身にしむ独寝の床

鈴虫巻

(簡) ナシ

(一六) 秋の雨のしくる、のへにす、むしの聲ふりすて、夜〇すから鳴

夕霧巻

(簡) 道もみえ 末もはるかか夕霧に分まよひぬる 秋の山人

(一六) 道も見えずすゑもはるかか夕霧に分まよひ散 秋の山野へ

御法巻

(簡) たくひなき弥陀の御法の舟うけて彼岸ちかくいつか渡らん

(一六) たくひなき弥陀の御法のふねうけてかの岸ちかくいつか渡らん

幻巻

(簡) ふしてみる夢まほろしの世中に驚かぬ身の程も媿し

(一六) ふして見る夢まほろしの世中におとろかぬ身の程もはつかし

雲隠巻

(簡) 月影の夜半に幾度かわるらん秋はひまなく雲かくれして

(一六) 月かけの夜半いく度かわるらんあきはひまなく雲かくれして

匂兵部卿巻

(簡) あたにちる花の香匂ふ深山路もやすらふ程にくる春の日

(一六) あたにちる花の香にはふ深山路にやすらふほどに暮ぬ春の日

竹河巻

(簡) ナシ

(一六) 水上はなかれひさしき竹川の水にも千世の色や見るらむ

紅梅巻

(簡) ナシ

(一六) た、こふるこふはひ香にも源に念佛にそみてこくらくのそら

橋姫巻

(簡) 二なき身を捨てて、うはそくの徳をたつねし程の久しき

(一六) ふたつなき身をすてはて、むは玉の法を尋し程の久しき

椎本卷

(簡) つどに又木のは散しくしゐかもとにかよふ風の程そ久しき
(六) つゐに又木葉ちりしく椎か本に通 風の音そひさしき

縮角卷

(簡) 海士に契りむすひしあけまきのとけぬ心はなふもうらめし
(六) あま人にちきりむすひしあけ巻のとけぬ は猶も浦久し

早蕨卷

(簡) みし人の契りたえせぬさわらひの折くことにとふそうれしき
(六) 見し人の契たえせぬさわらひのおりくことをとふそうれしき

宿木卷

(簡) 誰かみし軒はの梅のやとりきて月も霞て花にしたかふ
(六) たれか見し軒端の梅のやとりきて月に霞て花にしたかふ

東屋卷

(簡) 降くらしなかめるつらし東屋の敷にかいなきぬる、すかみの
(六) ふりくらすよそ共 つらし東屋のしくにかひなきぬる、すみの香

浮舟卷

(簡) 釣をたれて奥にた、よふ浮舟の波間によする淀の岩きし
(六) つりをたれ おきにた、よふ浮舟の浮ねをそする淀の岩岸

蜻蛉卷

(簡) あたに置露の身にたにかけろふのあるかなきかの世をいと、や
(六) あたにおく露のうき身はかけるふの有かなきかの世を 厭は、や

手習卷

(簡) 御法をまかきと、め 直本 手習 直本 そうき世の中の 思 出といふ
(六) みのりをも書か 直本 わめ 直本 たる 直本 手ならひのうき世の中のおもひ出と云

夢浮橋卷

(簡) 玉つさをかけて 心にみし夢のうき橋といひしよはの鶴
(六) 玉つさをかけて 小路に見し夢のうき橋といひし夜半の初雁

●夢浮橋卷以降の七首〔源氏六十三首之哥〕にのみ収録

月に吹風さむしろを打はらい幾風の、うらみきつららん。
あわれ也軒端の竹に鶯の巢守と成し残るかい子は
三河には雲手に水のなかるれば八橋かけて渡はしけ也
たまかつらかけておもひしさしくらに我黒かみの涙する、め
おとを 直本 つて君にかたみの文なれば涙なかる、水草の跡
としをへて山さかのほるおいうとのとるやつまもこりはてぬかな
けさ見れば小菊かのへの秋風に玉ちる露の数もしれられす